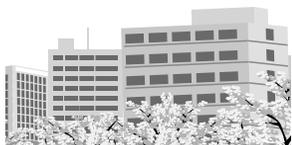


## 会員の広場



### 二〇一八年初夏、ロンドンで想うこと

夏目 敏夫（東京）

◎幕末、林子平は「江戸湾はテムズに通ず」と述べた。それを眼下に、私は今、「ロンドン・アイ」のゴンドラの中に居る。賑やかなラトビアの大学生の団、彼等はロンドンに憧れの地、働き、学びたいと、一句同音に語る、北から脅威と求職問題を抱えた東欧移民、予備軍であるかも知れない。一方、EU離脱(BREXIT)は、若き英国人にと

ってEU各国で自由な就職が出来ない懸念を感じている。昔は移民とは「インド・パキスタン系」だったが、最近では中近東系が増えて英国社会のバランスが変わった。「離脱」と共に英国の悩みである。◎「アート」はターナー美術館である。不運にも白タクだったのでカードは使えず、支払いで悶着したうえ、降車すると何と「大英博物館」。守衛が紙に「TATE」と書き、これを黒塗りのロンドン・タクシーに示せと。親切さに英国人らしい一面を感じた。ガイドは50代、夫はネイティブの日本女性、充実した説明だった。ハムレットの「オフエリヤ入水」は心に残る作品、そして英国の誇り、ターナーは前衛画の開祖、多くの抽象画家に影響を与えたと知った。次に水上タクシーで「アート・モダン」へ。外観は旧火力発電所。館内はアバンギャル

ドの殿堂、ピカソ、マチスからウォーホールまでを観賞した。内部は現代風の設備で機能的。古い建物を利用、維持するセンスは見習うべきと思う。最後は王立軍事博物館、再訪だが第二次大戦終結70周年記念行事もあり大混雑だった。「V1・V2」は当時のドイツの軍事力、それに勝利したチャールズの人気は高い。最近の「ガルフからIS」との戦闘系譜は凄まじい。展示品は充実していたが、日本関連には、やや問題ある展示を発見した。

◎2階建赤バスで観光と文学散歩をする。トランプ大統領デモ、全欧サッカード騒々しい市内。ガイドは日本人システム技術者が夫の英国女性。時折早く日本へ行きたいと口にしていた。そして何故か、各所のテロ現場を案内したことで、その原因を納得した。表面、陽気に穏やかな彼女も内面

に、異教徒移民であり、英国で生まれ育った彼等によるテロ行為に、失望、疑心、不安を持つと察知した。初夏のロンドンは美しい。その中で各所に新旧の入替えはあっても古色は立派に影を残していた。閑話休題、漱石記念館は休館となった。夕食は彼女に仕切られ日本食となり、そこで週刊ジャーニーなる雑誌を入手、居住者中心だが日常に役立つものである。

◎「英空軍創立100年記念エア・ショウ」に行く。欧米他各国参加、ロシア・中国は事情で不参加でも、壮大な空の祭典、各国の精鋭機と曲技飛行を含めてである。日本は「空自」のC2輸送機のみ参加。隊員達と交歓した。AI時代に入って、航空宇宙産業の競争は激化している。この様な国際行事、空のオリンピックには積極的に参加の必要性を感じた。